

の平方なり斯の如くにして總ての數の平方を見出すことを得

(完)

九州學生と居る

曩きの第五高等中學雇教師ラフカデオ、ヘルン今の文科大學講師小泉八雲氏先年一書を著し題して極東通信といふ中に我高等中學に付て評議せる一篇あり左に譯する所即ち其二節なり西洋に生れて東洋の事に精通せるヘルン氏の觀察果して肯察に中れるや否や豈一讀三省の價なしといはんや然れども氏の文名は噴々として西洋の文界に鳴れり予の淺劣を以てして敢て其意を寫さんさす玉を石さなすの誹固より期する所

在文科大學 不老庵主人

第一

高等中學の學生は殆んど小供と稱し難し其年齢は最低級の平均十八年より最高級の平均二十五年に至る此経路は恐らく少しく長きに過ぐべし最良の生徒も二十三歳以前に帝國大學に入るとは殆んど望み難し大學に入るには漢文に熟し併せて英佛若くば英獨の二國語を實用し得るを要す即ち彼等は優美なる國文學の外更に三外國語を學ばざるべからざるなり而して其事の困難なるは只漢文を學ぶのみにて歐州の六國語を學ぶの勞を要するを知らざれば解知し難からむ

予が九州學生と接せし感覺は始めて出雲の學生と相知りしときの感とは痛く異れりきどは前者は既に日本少年の愉快にして可憐なる時期を過ぎて熱心にして沈着なる成年の時期に入りしが故のみにあらず亦彼等は所謂九州氣質といふものを著しく代表せるを以てなり九州は今猶曠昔の如く日本中最も保守の地方にして其主府熊本は實に保守感情の中心なり然れども此保守主義や正理に合し併せて實際に適す九州は鐵道を採用し農業を改善し或工業には科學を應用するに於て躊躇する所なか

り然れども西洋の風俗習慣を學ぶに吝なるに至つては全帝國の地方中九州の如きはなし古來の武士精神は今猶依然として行はる此精神のあるが爲に九州は數百年間生活奉身の質朴簡易を要せしなり衣服の華美其他の奢侈を防ぐ費用制度ハ久しく強行せられたり今や此制度廢して既に數世に及ぶも其服裝の質朴なる其風俗の簡易にして直截なる今猶其流風遺韻を見るに足る熊本人は亦古來口傳せる行儀を墨守するの特質なりと稱すこれ他處に於ては既に久しく忘却する所なり又熊本人の特質として其言語動作に於て一種の不羈なる撲訥の風ありこれ外人に在りては之を確説する難しと雖ども苟くも教育ある日本人は直に之を看取するを得ん而して此地亦雄偉なる清正公の城——今や大なる鎮臺兵の據守せる——の陰に在り國民的情操の強烈なる帝國首府すら遠く及ばずと稱す——其忠君の情に於て其愛國の情に於て——熊本は凡そ此等のものを誇り又其口碑の傳ふる所を誇る然り熊本は實に此等の外更に誇るべきものを有せざるなり熊本は市は尨然として纏まり悪しく無趣味にして鄙陋なり一奇巧華麗なる市街なく一宏大なる寺院なく一驚すべき園圃あるなし明治十年の兵燹に一焦土となり今に至るまで猶荒地を見るの感あり只焦烟未だ全く去らざるに匆々に建てたる粗弱の假小屋あるのみ此地遊觀すべき一勝地なし(少くとも市中に於ては)——一眺望なし——娛樂僅に之あり——かるが故に人此學校の位置を以て恰當となす其寄宿生は一物の誘惑なく又一物の心を攪亂するものなし但し更に一原因ありて富人は其子弟を遠く東京より熊本に出遊せしめんとす是れ他なし彼等は其子弟の所謂九州魂てふものに染潤し而して九州音ともいふべきものに習はんことを欲するなり熊本は此音を有するが故に全國中最も特異の學生と稱す予は遂に十分之を學ぶ能はざりしが故に善く之が意義を定むる能はず但し幾分か古九州武士の行儀と因縁あるは明なり勿論東

京若くば京都より來れる學生は自ら化きて此特異なるミリュウに適合せざるべからず熊本并に鹿兒嶋の青年は兵式体操若くば他の特別の場合に已むを得ず制服を着用する外は今猶一種の衣服を衣んと勉むこれ稍古武士の衣服に類するものにして劍舞の歌に有名なる骨に至るの衣腕に至るの袖とは即ち是れ衣服の材料は低廉にして粗惡に而して其色は地味なり裂襪(足袋)は僅に之を穿つ即ち嚴寒堪え難き時若くば長途行軍の際草鞋の紐の其肉を噛むを防がん爲めに之を用ゆるのみ其風は粗暴に流れず而も柔弱にあらず少年は一種剛毅の氣質を外に張示せんと勉むるが如し彼等は非常の事に際しても顔色自若として嘗て其寧靜を失はず然れども彼等は炎々として此自制の下には自ら其氣力の伏在することを覺知す此力の時ありて爆發するや凜然として戰慄當る能はざらしむ彼等は亦其東洋流に於ては朴訥(honest)の人と稱するを得ん予の知れる或者は割に富裕の家に生る然れども其樂は如何に肉體の苦に堪ゆるかを試すに過ぐるものなしとなす勿論彼等の多數は自家の高尙なる主義を捨てんよりは寧ろ躊躇なく其生命を棄つるならん國家一旦緩急あらば全四百の健兒は一瞬變じて鐵兵の一團とならん然れども彼等の外良は不可思議なる迄に常は柔順なるなり

予は久しく異しみて遂に得る所なかりき彼等の恬然なる和平の内には如何なる感情觀念の隱匿するやを國人の教師等(固より政府の官員なる)は其生徒と嘗て相親しむの風なく予が出雲にて見し熙々たる親睦の如きはこゝには其痕だになかりき授業者と受業者との關係は諸級を集散せしむる喇叭の音と共に始り喇叭の音と共に終るが如く覺えき予は此觀察の少しく誤れりしことを後に至りて知り然れども實際彼等の間に存せし關係も自然の關係に非ずして寧ろ儀式の如くにて出雲にて見し古様の霏々たる和氣とは似るべくもあらずさあはれ此古様の和氣よ予は彼の八百萬の神の國を立ち

て後嘗て予の記臆を去ることなきなり

第 五

こゝに師弟の關係に一點儀式風を交えざる一例あり——これぞ武士學校當時の貴重すべく相愛の遺風なる漢學の一老教授ありて人皆此翁を尊敬せざるなし翁の青年に於ける勢力は甚だ大なり一言能く曝發せる怒情を鎮め一笑能く猷身の義氣を鼓舞するを得るなり他なし青年の翁を視る翁は舊時の美風剛勇誠實高邁(即ち是れ古日本の魂魄)の理想を代表するものとせばなり

『秋の月』といふ意義を有する翁の名は其の生國にては甚だ有名なり近日翁のことを記せる一小冊子を出版せ其の肖像をも出せり(譯者曰くこれ予輩の嘗て印刷せし鎮西餘響をいふ)翁は嘗て會津侯に屬する高格の武士なり翁は夙に信任せられて要位に登れり一たびは軍を率ひて將たり一たびは侯伯の間に説客たり一たびは政治家たり一たびは諸州に知事たり——凡そ封建時代に於て武士の驥足を伸すべき地翁之を経歴せざるなきなり然れども軍を統べ政に參する間には翁は常に教師たりしが如しかくの如き教師天下幾人かあるかくの如き學者天下幾人かある然れども今日に於て翁を見よ諸君は翁が善く其の配下の暴武士を懷柔せし所以を見ん唯奈何ぞかくの如くにして能く彼等を畏縮せしむるを得んと疑はん其の眉宇に溢るゝ藹々たる和氣壯時峻嚴を以て嗚りし此武人の如きは天下復無らん

封建制度が最後の生存競争を爲しゝとき翁は其主君に召されて彼の會津の童幼婦女をも羅し去りたる猛烈の戦争に加はりたり然れども勇氣と劍戟とは新戦法に打勝つ能はず會津方は遂に敗れたりかくて其一方の將たり翁は國事犯罪者として久しく獄に在りき

然れども勝者は却て敗者たる翁を推尊しき翁が抗敵せし政府は敬を盡して翁を用ゐ以て新時代の教育に當らしめたり新時代は弱年教師より西洋の學術と國語とを學習せり然れども翁は猶萬古不易なる支那諸聖賢の智識を教授せり——及び志義、名譽其他凡て人間を作り成す所以の者を

翁は其子女の二三を失へり然れども嘗て寂寞を感ずることなし他なし其薰陶を受けし者は皆其子の如くにて亦然く翁を尊敬すればなりかくて先生は老ひぬいたく老ひぬ神 (God) の如く見ゆるまで老ひぬ——神様 (Kami-Sama) の如くに

技術にて表彰する神様は少しも佛陀と肖似する所なし神様は佛陀よりも更に古く在し其御影は頭を垂れて下を見たまはず沈思無覺の相を示したまはず神々は甚だ自然界を愛したまふ或は自然界の最も朗々たる幽邃界を天翔りたまひ或は自然界の樹木に垂跡して其精靈となりたまひ或は行く水の音によりて御物語りしたまひ或は天風に駕しく飄遊したまふ神々は嘗て下界に人間として在まき今日の國人はやがて其後胤なり神々は今や幽界の神靈となりたまへるも猶頗る人性を存し又様々の性質を帯びたまふ神々は生者の感情にして又五官なりされど傳説又は傳説に基ける技術にて現形せる神々を知るは甚だ愉快なり予は近ろ懷疑説行れて猥りに神威を冒瀆する拙劣なる技術をいふに非ず神々に關する聖典を説明するに足る古技術に就ていふなり固よりかゝる技術の表彰する所亦種々なり然れども若し人あり普通傳説せる神 (Kami) の風丰如何にと問はゞ予は將さに答へんとす其相は驚くべく温和に長き白鬚を有し白次を着け白帶を結べる古代の笑める人なりと

老教授が近ろ予を訪れしときの様は宛然神道 (Shinto) の此面影にてありき唯其帶の白からで黒絹なりしことのみぞ唯神ならざりける

翁は學校にて予を見て曰く予は君の家に近る慶事ありしことを知る而まて予の行祝せざりしは予が年老ひたるが故にも非ず又君の家の遠隔せるが故にもあらず唯予久しく病ありしが故のみ將さに不日に君を訪はんとすと

かくて一日清朗なる午後翁は慶賀の贈物を齎らして來れり——其贈物は古縁にして高尚なる禮義の贈物にして其物は質朴なるも然も君侯の具といふも恥ぢず即ち一小梅樹の枝も梢も花の雪を著けて眩さばかりなると奇雅にして清麗なる竹器の酒を盛れると美詩を書せる二幅となり其詩は有數能書家の作として素より貴重なるものなりき否るも翁自ら揮毫す予に取りて奈何ぞ貴重ならざらむ翁の告げし所予は十分之を知らず唯記す翁は予の義務に就て親愛なる獎勵の語を與へ二三賢明にして割切なる忠告をなし又自らの少時の奇話を告げれしことを但し此時予は唯愉快なる夢を見る心地せり他なし翁の唯座に在るのみにて予は恰かも愛撫せらるゝの想あり其の贈られし梅の香は宛ら高原 (Takama-no-hara) より薫り來るが如く覺ければなりかくて神の徂徠したらんが如く先生は笑ひて去れり——後に残れる諸物を盡く聖化しつ。あゝ小梅樹の花は落去せり其再開を見んは一玄冬の後を待たざるべからず然れども空虚なる客室の内今猶何者か馥郁として去來するが如きを覺ゆこれ恐らくば唯彼の神翁を記憶するより然るならむ——恐らくば祖先の精靈、過去の貴婦人 (Lady of the Past) が當日翁に従て冥々に吾摑を越えて入り來り而して翁が予を愛するか故に暫らく予の傍に留まるを以てならむ

匆々譯し去る文字の不練は論なき義理を誤る處亦必らず之あらん幸に諒せよ 不老又識